

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：33929

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590135

研究課題名(和文) 対人嫌悪感の機能と心理的機序に関する適応論的研究

研究課題名(英文) Study of interpersonal dislike/disgust feelings; functions and psychological mechanisms

研究代表者

河野 和明 (Kawano, Kazuaki)

東海学園大学・人文学部・教授

研究者番号：30271381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、適応論的な視点に基づいて対人嫌悪の特徴をさまざまな面から明らかにすることであった。質問紙調査の結果、対人嫌悪の認知的内容として「非共感・回避」、「嫌悪対象者の無能化」、「存在の否定」の3側面が示唆された。また、対人嫌悪は対象者の回避・排斥を志向させるが、対象者に対する反響にはつながらないこと、相手が自分と異なる、あるいは相手が自己中心的と認知するほど、援助量が抑制されることが示された。また、「嫌われたくない」という心理は援助量を高めることが明らかとなった。接触回避について、恋愛対象者に対しては男女とも低下するが、この傾向は女性で顕著なことが示された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to clarify characteristics of interpersonal dislike/disgust feelings, based on viewpoint of adaptation. The results of questionnaire surveys suggested that cognitive factors for disliked person were "antipathy/avoidance", "incapacitation of disliked person" and "negation of disliked person". Dislike feelings induced cognitions to direct avoidance or exclusion of the disliked person, while did not enhance mental rumination of the disliked person. Selfishness of the person and perceived differences from the person were the most inhibiting factors of helping. Tendency to avoid being disliked by others increased helping tendencies. Both men and women reported lower levels of contact avoidance toward romantic interests than to opposite sex friends, but the tendency was more significant in women.

研究分野：感情心理学

キーワード：対人嫌悪 援助傾向 適応 接触回避

1. 研究開始当初の背景

ダーウィン(Darwin, 1872 /2005)は、嫌悪感が有害な食物の味覚への反応に由来し、嫌悪感には適応的必然性があるとした。嫌悪の文化進化理論(Rozin et al., 2000)はこの観点をさらに発展させ、社会的な対象を含む嫌悪感へと機能論的に拡張を行った。しかし、社会適応を考えたとき、とりわけ対人嫌悪には一般的対象への嫌悪とは異なる側面をもつ。第一に、他者を嫌悪することには大きなデメリットが存在する点がある。進化心理学が説くように、われわれの社会は相互利他性社会(Alexander, 1987)であり、互いの協力によって相互の利益を増大させてきた。そこでは、感謝・同情、罪悪感、正義感などの多くの社会的感情が、相互利他性社会を安定的に維持するように機能している(Trivers, 1971)。しかし、親和的な感情を抱いた方が相互にメリットがずっと大きい場合でも人はしばしば嫌いあう(嫁姑問題を想起せよ)。すなわち、対人嫌悪は相互の協力関係を明らかに阻害する背景感情であり、必ずしも明白に有害でない他者に対しても強固に生じることが適応論的にきわめて興味深い。この場合、何が嫌悪感を引き起こし、また維持しているかが重要な問題となる。同様に、他者を嫌うことはしばしば自己の社会的評価を引き下げる。身近な他者を嫌悪することは社会的規範から一般に否定的な評価を受ける。嫌悪する者は嫌悪されるのである。したがって、「嫌悪すること」と「嫌悪されること」の、いわばメタ認知が嫌悪感そのものに影響する重要な要因となっていることが予想される。第二に、対人嫌悪は中長期にわたる社会関係の調整に関与する点がある。したがって、現実の対人嫌悪の機能を理解するには、社会的関係の変化を視野に入れることが必要になる。

対人嫌悪研究の第一歩として、報告者らは他者に対する接触回避を取り上げた。すなわち、特定他者の身体に対する接触を回避する傾向である。これはいわゆる「生理的嫌悪感」に相当すると思われる概念であり、病気感染の予防機能や異性間においては性的接触の回避を反映すると考えられる点で基本的な心理行動傾向である。すでに報告者らは接触回避尺度を完成させ、一連の調査的研究において様々な属性をもつ他者に対する大学生の接触回避傾向を測定した(羽成他, 2009; Kawano et al., 2011)。その結果、明瞭な性差が示され、それらは男性と女性の生物学的な適応上の制約から予想されるものと一致した。すなわち、対人嫌悪は適応的条件を明確に反映することが示唆された。しかしながら、対人嫌悪は生理的嫌悪感に限定されない幅広い内容を含む感情である。たとえば、特定の人物に身体的魅力を感じても人格面には強い嫌悪を感じることは十分にあり得る。つまり、対人嫌悪はその内容として、生理的嫌悪感、軽蔑、怒り、恐怖感などを含んでいると考えられる複合感情である。これらの内容

の詳細、対人嫌悪時の認知、行動などのメカニズム面、対人嫌悪がもたらす社会的帰結などの詳細はいまだ明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、対人嫌悪感の特徴を、機能論的な視点に基づいて、認知、行動、社会的関係の各側面から解明することにある。対人嫌悪は日常的な対人葛藤の中核的な感情であるが、従来の研究においては、対人魅力の逆の現象という扱いを受けることがほとんどで、いわば対人魅力研究に付随して論じられてきたにすぎない。ところが、嫌悪感は一 generally 自己にとって有害な対象を回避する機能を担っており、適応上きわめて重要な意味を持つ独自の感情である。本研究では、対人嫌悪の内容、認知、行動にかかわる要因を明らかにし、対人嫌悪を総合的に把握することを目指した。まず、研究1では主として対人嫌悪の認知的内容を明らかにする。続く研究2では、対人嫌悪がどのように援助傾向に影響するかを明らかにする。そして、研究3では、付加的に接触回避が恋愛感情によってどのように変化するかを明らかにする。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するため、本研究では基本的に質問紙調査を用いて実証データを取得した。なお、以下に記載する研究以外にも周辺的な条件や心理特性を扱った調査研究を実施したが、紙幅の関係上ここでは詳述しない。

研究1の方法

嫌悪対象者について、心的反芻および認知の歪みがどのように生じているかを中心とし、対人嫌悪の内的処理の特徴を明らかにするため、以下のような方法を用いた。

参加者：東海地方の大学生 392名(男性 117名、女性 275名)を対象とした。平均年齢は20.58歳($SD=1.31$)であった。

質問紙：まず、(1)身近にいる人物で「最も嫌いな人、苦手を感じる人」(以下、「嫌悪対象者」)の想起を求めた。現在、嫌いな人や苦手な人がいない場合は、一番最近まで嫌いだった人、苦手だった人を想起するよう指定した。その後、(2)嫌悪対象者の性別・およその年齢、(3)嫌悪対象者に関する心的反芻および否定的認知を問う項目、(4)嫌悪対象者に対する感情(尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪感)、(5)接触回避尺度(河野ら, 2009; Kawano et al., 2011)、(6)不合理な信念測定尺度短縮版(森ら, 1994)から各下位尺度3項目ずつ、(7)ベック絶望感尺度(Tanaka et al., 1998)から10項目、(8)ネガティブな反芻尺度(伊藤ら, 2001)、(9)GHQ28(中川・大坊, 1996)などの質問への回答を求めた。

研究2の方法

研究2では、嫌悪が援助傾向に及ぼす影響

を明らかにするために以下のような方法を用いた。

参加者：東海地方の大学生 402 名（男性 123 名、女性 279 名）を対象とした。平均年齢は 19.71 歳（ $SD=1.13$ ）であった。

質問紙：質問紙では、同性または異性の実在人物の想起を求め、この人物に対する感情・認知の評定を要請した。人物には、嫌いな人物（嫌悪人物）と感情的に中性の人物（中性人物）とが指定されていた。また、想起人物の性は参加者と同性の場合と異性の場合を設定したが、本報告ではこれらをプールした結果を示す。評定項目は以下から構成されていた。(1)被嫌悪回避尺度：他者から嫌われることを避けようとする傾向を測定(河野ら, 2014; 全 10 項目、5 件法)。(2)想起人物に対する感情(「尊敬」「愛情」「恐怖」「軽蔑」「嫌悪」)の強度(7 件法)。(3)嫌悪人物への否定的認知：嫌悪人物に対する否定的認知を測定する項目(自作の全 12 項目、6 件法、 $\alpha=.87$)。(4)对人的嫌悪感尺度：嫌悪人物の嫌悪的な特徴 8 種(「自分との相違による嫌悪」「相手への妬みによる嫌悪」「相手の傲慢さによる嫌悪」「相手の自己中心性による嫌悪」「相手の主張過剰による嫌悪」「自分との類似による嫌悪」「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」)を測定する尺度(斎藤, 2003; 各下位尺度の因子負荷量の大きい項目から最大 5 項目を採用、7 件法)。(5)想起人物への援助傾向：小田ら(2013)の対象別利他行動尺度を特定人物に対する援助行動を問うように改変した項目(全 7 項目、6 件法)。

研究 3 の方法

研究 3 では、本研究の付加的な知見を得るために、配偶を前提とした特殊な対人感情である恋愛感情と、嫌悪の中でもとりわけ接触回避がどのような関連をもつかを明らかにするため、以下のような方法を用いた。

参加者：大学の学部学生の男女 334 名（126 名の男性、208 名の女性）であった。年齢の範囲は、18-28 歳であり、平均年齢は 20.29 歳（ $SD = 1.09$ ）であった。

質問紙：各調査対象者に、恋愛対象者、同性と異性の友人を一人ずつ想起させ、まず、恋愛対象者に対する熱愛度(Passionate Love Scale; PLS; Hatfield & Sprecher, 1986)、次に各人物に対する 4 つの感情(「尊敬」「愛情」「軽蔑」「嫌悪感」)、最後に各人物に対する接触回避の程度(Kawano et al., 2011; 河野・羽成・伊藤, 2012)を測定した。

4. 研究成果

研究 1 の成果

(1)嫌悪対象者の性：嫌悪対象者として、男性回答者の 89.7%が男性を、10.3%が女性を挙げ、女性回答者の 72.3%が女性を、27.6%が男性を挙げていた。分布の偏りは有意($\chi^2=127.39, df=1, p<.001$)であった。男女とも

同性嫌悪の傾向がみられるが、男性により顕著と言える。対人嫌悪の背景となる対人葛藤は、当然、社会的役割の影響を受ける(例；立場上、上司は嫌われやすく、現状で上司に男性が多いなら、結果的に男性が嫌われやすくなる)。しかし、大学生は社会的役割や職業的立場の影響が比較的少ないとすれば、社会的あるいは生物学的に男性の性内競争が激しいことが高い同性嫌悪の背景となっている可能性がある。

(2)嫌悪対象者に対する認知と反芻の項目：因子分析(主因子法バリマックス回転)の結果、反芻因子と否定的認知因子が予想通り抽出された。そこで、反芻因子に高い負荷を示した項目の得点を合計して嫌悪対象者に対する反芻得点とした($\alpha=.87$)。それ以外の項目はほぼ全項目、嫌悪対象者に対する否定的認知であった。項目の合計得点を否定的認知得点とした($\alpha=.91$)。嫌悪対象者に対する反芻得点および嫌悪対象者に対する否定的認知得点は両性でほとんど同一であり、性差は認められなかった(t 検定による)。否定的認知の内容を分類するため、当該項目に因子分析(最尤法プロマックス回転)を行った結果、おおむね 3 因子解が妥当と思われた。第一因子は「非共感・回避」、第二因子は「嫌悪対象者の無能化」、第三因子は「存在の否定」と解釈された。われわれは嫌悪対象者について、共感を断ち切り、無能化し、存在を否定するように一般に認知するものと解釈できる。

(3)主要変数の相関：Table 1 に主要な変数間の相関係数を示す。

Table 1. 主要な変数の相関係数行列。

	1	2	3	4	5	6	7
1. 単なる「嫌悪感」評定							
2. 接触回避	.30**						
3. 嫌悪対象者に対する否定的認知	.40**	.46**					
4. 嫌悪対象者に対する反芻	-.01	.07	.01				
5. ネガティブな反芻傾向	.08	.17	.10	.34**			
6. ネガティブな反芻の制御不能性	-.02	.08	.01	.31**	.65**		
7. 絶望感	-.04	.11	.09	.18**	.43**	.42**	
8. GHQ	.12*	.16**	.13*	.20**	.44**	.35**	.51**

correlation(r) ** $p<.01$, * $p<.05$

嫌悪対象者に関する反芻は一般的なネガティブな反芻や絶望感、不健康と関連するが、嫌悪対象者に対する否定的認知や接触回避と相関がなかった。嫌悪対象者に関する否定的認知は、単なる嫌悪感評定や接触回避と相関するが他とはほぼ無相関であった。本調査の範囲では、対人嫌悪は対象者の回避・排斥を志向する認知を生じさせるが、その後の反芻にはつながらないと考えられる。

研究2の成果

(1) 嫌悪と援助傾向の関係：嫌悪人物に対する嫌悪感の単純評定と援助傾向との間の単相関を算出したところ、有意な負の相関が示された($r = -.37$, $N = 304$, $p < .01$)。また、嫌悪人物に対する嫌悪認知総得点と援助傾向との間の単相関にも有意な負の相関が示された($r = -.67$, $N = 304$, $p < .01$)。これらは、対象とする人物への嫌悪感が強いほど援助傾向が抑制されることを示すものと考えられる。嫌いな特徴と援助傾向の関係：嫌悪人物の嫌いな特徴8因子のうち、身体的特徴(「相手の外見による嫌悪」「相手の話し方による嫌悪」)以外の6因子を独立変数、当該嫌悪人物に対する援助傾向を従属変数とした重回帰分析を行った結果、「自分との相違」「相手の自己中心性」による嫌悪が援助傾向と負の、「相手への妬み」による嫌悪が正の有意な偏回帰係数をそれぞれ示した(Table 2)。

Table 2. 嫌悪人物について、援助傾向を従属変数とし、6種の嫌いな特徴を独立変数とした重回帰分析の結果(強制投入法)。

	<i>t</i>	<i>p</i>	
自分との相違による嫌悪	-.119	-2.219	.027
相手への妬みによる嫌悪	.306	5.854	.000
相手の傲慢さによる嫌悪	-.066	-1.063	.288
相手の自己中心性による嫌悪	-.171	-2.759	.006
相手の主張過剰による嫌悪	.006	0.118	.906
自分との類似による嫌悪	.062	1.211	.227

相手が自分と異なる、あるいは、相手が自己中心的と認知するほど、援助量が抑制されることが示唆される。一方、「相手への妬み」の項目(「自分よりも優れている」「自分にとってうらやましい面を持っている」など)は相手の価値が高いとする認知を示すものと考えられ、嫌いな相手でも価値のある資源を持っている場合は、援助行動を増大させるものと解釈できる。

(2) 被嫌悪回避と援助傾向の関係：中性人物に対する5種の感情と被嫌悪回避得点を独立変数、援助傾向を従属変数とした重回帰分析の結果、尊敬と愛情は正の、嫌悪は負の、被嫌悪回避は正の有意な偏回帰係数をそれぞれ示した(Table 3)。

Table 3. 中性人物について、援助傾向を従属変数とし、5種の感情と被嫌悪回避傾向を独立変数とする重回帰分析の結果(強制投入法)。

	<i>t</i>	<i>p</i>	
尊敬	.259	4.878	.000
愛情	.308	5.999	.000
恐怖	-.030	-0.494	.622
軽蔑	.009	0.101	.919
嫌悪	-.164	-2.007	.045
被嫌悪回避	.106	2.369	.018

ここでも、嫌悪感が援助傾向を減じる一方、尊敬や愛情が援助傾向を増大させることが示されると同時に、「嫌われたくない」と思う傾向が対象とする人物への援助を増やすように作用していることが示唆された。

研究3の成果

PLS得点の性差は有意ではなかった。同性友人については、尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪のすべてに性差が認められた。女性は尊敬・愛情のポジティブな感情が男性よりも強く、男性は軽蔑・嫌悪のネガティブな感情が女性よりも強かった。女性は男性よりも同性友人に対して親和的であると考えられる。異性友人については、尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪のすべてに性差が認められなかった。恋愛対象者については、尊敬のみ女性が男性に比べて強かったが、他の感情には有意な性差が見られなかった。次に、接触回避得点を従属変数として、回答者の性(男・女)と回避対象者(同性友人・異性友人・恋愛対象者)を要因とする2×3の分散分析を実施した(Fig. 1)。その結果、回避対象者の要因の主効果($F(2, 564) = 78.04$, $p < .01$)および交互作用($F(2, 564) = 32.38$, $p < .01$)が有意だった。単純主効果の検定を行ったところ、同性の友人($F(1, 282) = 21.91$, $p < .01$)、異性の友人($F(1, 282) = 22.03$, $p < .01$)、恋愛対象者($F(1, 282) = 5.89$, $p < .05$)のそれぞれにおいて回答者の性の単純主効果が有意であった。また、男性回答者($F(2, 216) = 24.60$, $p < .01$)および女性回答者($F(2, 348) = 123.37$, $p < .01$)において、回避対象者の単純主効果が有意であった。男性回答者のみについて3種の対象者の平均値を比較した結果、友人の同性-異性間に差は見られず、同性友人、異性友人のいずれに比べても恋愛対象者への回避が低かった($p < .01$)。同様に、女性回答者のみについて3種の対象者の平均値を比較した結果、異性友人、恋愛対象者、同性友人の順で回避が高かった(同性友人と恋愛対象者との差は、 $p < .05$ 、その他は、 $p < .01$)。

上記の友人に関する結果(女性の接触回避の程度は、同性友人で低く、異性友人で高いが、男性の友人に対する接触回避の程度は、同性と異性間で差が見られず、女性の回避得点の平均と同程度であった)は、スティグマ的属性を伴った人物を対象にした Kawano et al. (2011)の結果を明瞭に再現していた。友人、スティグマ的属性を伴った人物いずれにおいても、女性における異性への接触回避と同性への受容が一貫して認められた。

一方、恋愛対象者については、男性も女性もそれぞれの異性の友人と比べて明らかに回避が低下していた。PLS得点と恋愛対象者に対する接触回避との間には、相関係数は低いものの、男性($n = 110$)と女性($n = 173$)とも有意な負の相関が見られた(男性 $r = -.28$, $p < .01$; 女性 $r = -.28$, $p < .01$)。また、恋愛対象者について測定したポジティブ感情(尊

敬・愛情)とネガティブ感情(軽蔑・嫌悪)のうち、男性($n=110$)と女性($n=173$)とも、接触回避は愛情との間にのみ有意な負の相関を示し(男性 $r=-.40, p<.01$; 女性 $r=-.45, p<.01$)、他の感情とは有意な相関を示さなかった。

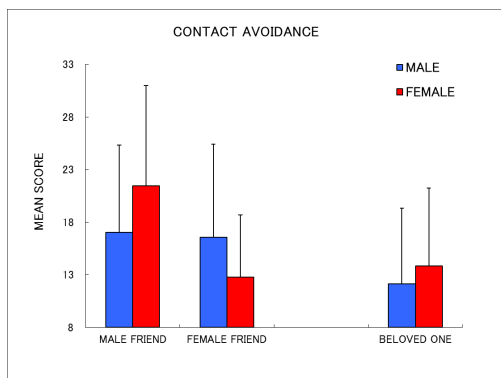


Fig. 1. 男性友人・女性友人および恋愛対象の異性に対する男女の接触回避得点

これは、男女いずれも、他の感情ではなく恋愛感情における強さが接触回避の低下をもたらすことを示唆する。しかし、上記のように、恋愛対象者に対する女性の回避得点は男性のそれよりも大きく、さらに、同性友人に対する回避得点よりも大きいという性差が認められた。PLS 得点には有意な性差が見られないことから、女性の恋愛感情が男性よりも弱かったわけではない。また、女性が恋愛対象者の異性を人格的に低く評価していたのでもない。恋愛対象の異性に対して女性の尊敬度が男性よりも有意に高かったからである。これは、女性の男性に対する接触回避が、恋愛対象者に対してさえも残存していることを示唆している。以上の結果から、男女とも恋愛対象者、すなわち配偶者候補に対しては、接触回避の程度を大幅に下げることが明らかになった。特に女性は、男性に対して通常は接触回避の程度を高く保っているが、恋愛対象者に対してのみ大幅に回避を下げた。

今後は、これらの知見を整理した上でさらに検討を進め、対人嫌悪がどのような過程を経て対人関係を制御しているかについて、総合的なモデルを構築することが課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 2017 日本人大学生における対人嫌悪に関する記述統計と性差, 東海学園大学研究紀要, 22, 80-90. 査読なし.

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 2016 嫌悪

対象者に対する援助傾向 - 援助を抑制する特徴は何か -, 東海学園大学研究紀要, 21, 123-129. 査読なし.

羽成隆司・河野和明・伊藤君男・石垣舞子 2015 日本人大学生における性的身体接触経験と抵抗感の性差, 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 15, 117-123. 査読なし.

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 2015 恋愛対象者に対する接触回避, パーソナリティ研究, 24, 95-101. 査読あり.

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 2015 対人嫌悪の理由と対処の関係 被嫌悪回避傾向を考慮して, 東海学園大学研究紀要, 20, 127-137. 査読なし.

羽成隆司・河野和明・伊藤君男・角田千夏 2014 青年期の女性の父親に対する回避傾向, 椋山女学園大学文化情報学部紀要, 14, 93-100. 査読なし.

〔学会発表〕(計7件)

Kawano, K., Hanari, T., & Ito, K. Psychopathic tendency, fantasy of homicide or injury, and like/dislike emotions for others: A correlational study. 2017年1月, The 15th Annual Hawaii International Conference on Arts and Humanities (Honolulu, Hawaii, USA).

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 配偶者に対する接触回避および愛情の年齢変, 2016年12月, 日本人間行動進化学会第9回大会(金沢市文化ホール).

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 対象者への嫌悪と資源認知はどのように援助傾向を制御するか, 2016年6月, 日本感情心理学会第24回大会(筑波大学).

Kawano, K., Hanari, T., & Ito, K. Which characteristics of disliked people inhibit helping behavior? 2015年7月 International Society of Research on Emotions, University of Geneva (Switzerland).

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 嫌いなヤツは助けたくない - 対人嫌悪と援助傾向の関係 -, 2015年6月, 日本感情心理学会第23回大会(新渡戸文化短期大学).

岩佐和典・今田純雄・河野和明・和田由美子・外山紀子・中村真 ワークショップ「本邦における嫌悪研究の現在」話題提供, 2014年9月, 日本心理学会第78回大会(同志社大学).

河野和明・羽成隆司・伊藤君男 サイコパ
シー傾向者は他者から嫌われることをどう
認知しているか？ 2014年5月，日本感情心
理学会第22回大会(宇都宮大学)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河野 和明 (KAWANO, Kazuaki)
東海学園大学・人文学部心理学科・教授
研究者番号：30271381

(2) 研究分担者

羽成 隆司 (HANARI, Takashi)
椋山女学園大学・文化情報学部メディア
情報学科・教授
研究者番号：40269668

(3) 研究分担者

伊藤 君男 (ITO, Kimio)
東海学園大学・人文学部心理学科・教授
研究者番号：70529627